こころを育む総合フォーラム

感謝の気持ち 幸せ生む

21世紀の日本人の心のあり方について、各界の有識者16人が論じ合う「こころを育む総合フォーラム」は、昨年4月の発足から計8回の討議を重ねた。討議は今年も続けられ、6月以降に提言として発表する。2回目の特集となる今回は、昨年後半の「メディアと心」などのテーマをめぐる討議で出された意見の概要を、メンバーの基調報告とともに紹介する。

（構成・調査研究本部　伊藤哲朗）

活発な討議が続くフォーラム

◆幸福感持つために は

「なぜ日本人全体に幸福感がないのか。かつては豊らしが豊かになれば、幸福になれると思っていたが、どうも裏切られたと感じている。日本人は不幸だとあおられ、そう思い込んでいるふしもある。そうした世の中をつくった我々も反省しないといけない」

「子ども時代は、隣町に行くのに決死の覚悟が必要だった。だから、世界を家から地域、地域から社会へと広げていく遠近法をたどることが成長であり、大人になるイメージがあった。だが、いまの日本では、そうした遠近法がぐちゃぐちゃになった感じがする」

「そこが問題だと思う。家庭の中にプライベートな領域があっても構わないのだが、それが家庭として機能しないで、孤立した空間ができ上がっているところに問題がある。社会との接点において、家族というフィルターを経由せずに、メディアを通して、あるいはネットワークを通して、いきなりダイレクトに社会と接しているからだ」

「人と人のかかわりに関して、どうすれば幸福感を持てるかということだが、やはり他人を尊敬する、他人に感謝する気持ちを育むところで、幸福感は生まれるのではないか」

「私は、『足るを知る』ということが、やはり幸せへの道ではないかと思う。地球の枠組みを考えようということが、これからの社会で大事になってくるのではないか。日本はそれを発信しなくてはいけない。そうすると、きわめて日本的な『足るを知る』という言葉が、東洋的な思想でありうるのではないか」

◆メディアと心

「メディア・リテラシーでは、メディアが言いたいことを批評的に見ることが大切だ。子どもたちと一緒に見る機会を増やす。『テレビはああ言っているけれど、こうじゃないかなとマスは思う』と批評的に見ることを教えてあげたい」

「テレビとのかかわりで危ういのは、人を受動的にしてしまうことだ。自分で考える前に、テレビのコメンテーターの意見が先に入ってくる。情報に受動的になっていくと、心に『たこ』ができなくなる」

「犯罪報道は、殺人や詐欺、汚職など社会での極端なケースを取り上げるが、そこから社会的な普遍性をどう学び取るかが事件報道の本質だ。注意しなければならないのは、犯罪の手口や方法を細かく報道することで、同種の犯罪を広げてしまうとか、模倣犯の発生に注意しなければならない。日夜、格闘している」

「企業として、心を育むという運動のために何をしたらいいか。番組と広告との関係について、企業側も反省すべき点があるのではないか。売らんかなとかいった動機だけで、番組にスポットを出してしまう。企業の良心に立ち返り、提供していく番組を検討していくべきではないのか。大きな一石を投じることになるのではと考えている」

◆企業倫理をめぐって

「トヨタも松下も、企業倫理を確立しておいでだと思うが、マンションの耐震構造の偽装問題では企業倫理はどこにあるのか。企業競争の修羅場にいても、人としての倫理を守れる人間を育てなければならない」

「20世紀から21世紀にかけての日本を代表する製造業の変貌に、社員はついていけたのだろうか。家庭もかえりみずに働いた人たちが、挫折を感じたりしたのではないか。そういう人たちのケアはされたのか」

「ものづくりと情報産業とは決定的に違うところがある。記者の能力によって、商品が部分的に劣化したり優良化したりする。会社内の競争、同業他社との競争はすごく激しいものがある。人材教育、社員教育をどうすればいいか、職業倫理をどう育てていくか」

「NHKの人気番組『プロジェクトX』のビデオを高校や中学校で見せると、生徒はつまらなそうな顔をするという。番組で描かれる技術者の群像の背後で、必ず家族が病気になるか死者が出る。そんな悲劇と裏腹の人生は送りたくない、と子どもたちは言う。真っ当な感覚ではないか」

「本当の教育をする場所は、学校よりも企業ではないか。子どもたちは、企業で自分の親父のような世代の人たちと働く、違う世代が支え合う。企業で真の意味での人生勉強をする」

「高等学校で、いろいろな道があるんだということを体験できる場を多くすることが大事だ。多様な路線があることを学ぶため、多彩な人たちと出会う体験を積むことを奨励すべきだ」

「第1に、企業は倫理観に基づいて、社員に希望と自信、やりがいを持たせる教育に取り組んでいただきたい。第2は、地域社会に貢献してほしい。第3は、社会での文化活動やボランティア活動、NPOの支援に努めてもらいたい」

中学生になるまでが大事

金澤一郎氏

心を育むには、中学生になるまでが大事だ。ポイントは三つある。

第一に、3歳ぐらいまでに、人を信じ、安心するという状態を経験させてあげたい。コミュニケーションの最初のステップであり、ここでつまずくと他人が怖い存在になってしまう。

子どものこころを上手に育む3か条

第2に、自分を抑制する力を身につけさせたい。そのために親たちは良いことをすればほめ、悪いことをすればしかることだ。

第3には、学童期に実体験をさせてやりたい。時には危険な目にも遭うが、それを乗り越えたという自信がつくだろう。

体験するにも限界はある。それを補うために、小学生時代に『走れメロス』や『一房の葡萄』などの優れた文芸作品を与えたい。

表現教育に広がる可能性

いまの子どもたちは、自己を主張して周囲とぶつかることが少ない。赤ちゃんのおむつを替えたり、お年寄りを世話したりすることもあまりない。子どもたちの心を育むには、人とのかかわりを学ぶ機会をつくってやるべきではないか。

親同士の交際、親せきづき合いに連れて行き、あいさつをさせる。けんかをしても止めず、子どもたち自身が傷を負って調整する機会をもうけてあげたい。学ぶことが呼吸で言えば息を吸うことなら、吐くことは文章や体を使っての表現になる。この表現教育に心を育てる可能性があるのではないか。お年寄りの前で、若者がシルバーシートを占拠する振る舞いは美しくない、表現として「いけていない」というふうに。

美学からのアプローチ

永井多恵子氏

メンバーの基調報告

互いの価値観理解しあう

張富士夫氏

わが社のグローバリゼーションは86年、米・ケンタッキーに工場をつくったことから始まった。60人の日本人に、アメリカ人は3000人。文化や価値観の違いが身にしみてわかった。

彼らの最高の価値は「自由」だ。自由に基づいて、とことん競争する。話し合って平和に、という私どもの考えはアンフェアだ、と言われた。一方、「ギブ・アンド・テーク」の言葉どおり、何かしてあげれば、必ずこたえてくれる。1号車から日本の製品に負けない品質にしてくれた。

グローバル時代の人材育成

人間的な魅力というか、自分の考えを持ち、相手の考え方も理解できる人がグローバルな時代に適応できる。そんな若い人たちを育て、代々つないでいくことが我々の使命ではないか。

「超正直」を社員に徹底

中村邦夫氏

わが社の経営は、松下幸之助が残した経営理念、哲学を軸に進めている。その点で、わが社は特殊な会社と言えなくもない。

私たちの本業はものづくり、製造業だ。良いものをつくり出していくのが本質であり原点だが、それに加えて良心を発露していく企業を目指したい。

社会的な行動基準を社員と家族に徹底していく。やさしく言えば、「スーパー正直」に徹する会社にしていきますよ、だから、皆さんもよろしくと。

企業内教育

企業の姿勢をいかに社会に発信するか、企業の良心をどう発露していくか。こうした企業行動が、社員全体の大きな支えになるのではないか。社会から企業の良心を認められる会社になりたいと願っている。

読書体験 ぜひ積んで

活字と教育

滝鼻卓雄氏

新聞業界は「NIE」活動を進めている。教育に新聞を取り込む活動だ。ある記事をみんなで読み、感想や意見を述べ合う。劇作家の山崎正和氏は、活字は民主主義の根幹だと言われた。活字の情報は1人で受け、反すうし吟味する。1人で考えることこそが民主主義をつくる、と。

朝の読書運動も行われている。授業前の10分間、生徒と教師が本を読む。運動を88年に始めた林公さんは、生徒の言語能力に危機感を抱いたからという。本をきちんと読むには、聞く、話す、書くことができなければならない。

私たちは、読書によって主人公の痛みを感じるなど、心を育ててきた。現代の子どもたちにもそうした経験をぜひ積んでほしい。

これまでの討議報告

育むべきこころとは

フォーラムでは過去4回、育むべき心とは何かを論じていただいた。この辺で中間の取りまとめをしたい。

戦後60年、社会は大きく変化した。第1は「急激な都市化」だ。コミュニティーが崩壊し、自然との触れ合いも失われた。第2は「核家族化」。孤立した母親の悩み、不安が子どもに影響している。第3が「物中心の消費社会化」だ。欲求が満たされない不満が個人の自制力を失わせる。第4は「急激な豊かさ」。なぜ勉強するのか、なぜ働かなくてはならないのか。豊かさの中での疑問に、先生もなかなか答えられない。第5が「高度情報化社会」だ。人や社会への関心は薄くなり、匿名性を悪用した犯罪が出現した。

目標は「人間力」「協生」

遠山敦子氏

どうすべきか。大きな目標としては、一人ひとりが自立して生きる「人間力」を備え、他者との「協生」を図り、同時に公共への参加の心情を持つことだ。そして「うそをつかない、殺さない、盗まない」という「人類の黄金律」、最低限の規範を身につけたい。日本人が大切にしてきた自然や芸術に感動する心、敬う心を持つ。学ぶ、働く喜びと大切さを知ることで生きがいを感じることができるのではないか。

こころを育む総合フォーラム

遠山敦子・元文科相を発起人に、各界の有識者16人（別表参照）が集まって昨年4月に発足。メンバーは月1回集まり、「21世紀の日本人の心のあり方」について討議を続けている。

メンバー

（敬称略、五十音順）

安西祐一郎（慶応義塾塾長）
石井幹子（デザイン事務所主宰）
葛西敬之（ＪＲ東海会長）
金澤一郎（国立精神・神経センター総長）
佐々木毅（前東京大学長）
滝鼻卓雄（読売新聞東京本社社長）
張富士夫（トヨタ自動車副会長）
遠山敦子（元文科相）
永井多恵子（ＮＨＫ副会長）
中村邦夫（松下電器産業社長）
中村桂子（ＪＴ生命誌研究館館長）
野依良治（理化学研究所理事長）
本田和子（前お茶の水女子大学長）
三村明夫（新日本製鉄社長）
山折哲雄（前国際日本文化研究センター所長）
鷲田清一（大阪大副学長）